

## 「下種」についての考察 2

— 『開迹顕本宗要集』を中心として —

清水俊匡

はじめに

前回の論文に於て下種についてポイント三点（下種する仏・下種される衆生・下種の種子）を示した。その中「衆生論」の一部としての「下種の心田」についての述べたが、その結果「心田」を単独で扱うことは問題で、「下種」は、「下種される衆生」と「下種をする仏」との関係において取り扱われなければならない問題であった。更に、「下種の種子」についても単に「種子」が唯識で言う処の成仏の根柢である「本有無漏種子」という具体的な「種」というイメージでは十分に「下種」を説明することは出来ないと思われた。

「下種」という言葉は唯識の言葉ではない。周知の通り、法華經に説かれた「仏が衆生教化をなす三つの段階」を『法華文句』（一上）（T 34・2 b 1 c）で「因縁の相を示す」中「種・熟・脱」の三益として説かれたもので、そこには既に三益が植物の種のイメージが付与されていると考えられる。即ち、衆生に仏種子を下すことが「下種益」、そしてこの「種」を育成することが「熟益」で最後解脱する事が「脱益」である。従って『文句』の初めの「種」の釈である「衆生久遠令仏道因縁」も下種は仏種を衆生の心田に植えると解釈される。とこ

ろで、心田に種を植えるとは如何なる事か、植物の種の様なものを心に植えるというのは譬喩であるから何かを喩えている、以下この喩えられる何かを注意しながら、『開迹顯本宗要集』に説かれる種・熟・脱について述べる。

### 種熟脱三益について

天台の四節三益に関連した所説を見る。

三世施化の主旨は種脱は一佛に従ひ、中間調熟は他佛に亘ると云ふ事<sup>〔一〕</sup>調熟は他仏に渡つてもよいとされるが、種脱は一仏の作業である。

次に二乗成仏について余経・迹門の成仏論に対して法華は過去遠々の下種種子の成佛を説くとされる。

天親菩薩は法華を以て種子無上と爲す、種子無上とは三五下種なり。故に五味主と爲し、五味主の下種種子を以て今日爾前迹門を見れば無得道教と成るなり。觀心抄に、爾前迹門圓教尚非佛因と云へる是れなり。仍て二乗は久遠下種の人なり。二乗も久遠下種の時は本化眷屬上行なり。而るに下種已後聽て退本取迹する故に、疏の一に中間爲種と云ふ。猶ほ大通下種を退大取小して小乗の人と成り、沈空して敗種する故に、佛意は下機を以て正と爲す。故に今日の出世成道は併しながら二乗の爲なり故に必ず二乗成佛の時は過去の父の種子に還つて眞實の成佛と成す。而るに爾前の諸經には三五下種を明さざる故に二乗成佛を明さざるなり。今經迹門の時大通下種を明す、其の下種の種子今日薰發して成佛を成すと雖も、佛種の種子を下す父は始覺の土民なる故に、實相の母の三千も王子も不定なり。故に本門に至りて土民の父を破廢して、發迹顯本の本

因本果下種の父大王を顯本すれば、二乗の現脱を以て昔の久遠下種に立ち還り、本因妙上行鉢具に流入して本果妙父大王に合して、本果の父大王と本因妙上行二乗九界の王子と父子十境界如事圓三千本地難思境智の妙法蓮華經の二乗成佛は迹門爾前に分絶えたるものなり。之に依て開目抄に云く、迹門には一念三千二乗作佛を説て爾前二種の失一つを脱れたり。乃至然りと雖も未だ發迹顯本せざれば實の一念三千も顯れず、二乗作佛も定まらず、乃至本門に至て中略本門の十界因果を説き顯す、是れ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備りて、眞の十界互具・百界千如一念三千なり文。觀心本尊抄これ同じ云云。此の如く二乗成佛の實躰は止觀外宜の邊には曾てこれなし。内鑿の止觀にはこれあり。立正觀抄抄状と八宗違目抄に弘五の十法既是法華所乘是故還用法華文等の文を引く是れなり。能く能く之を案ずべし。世間の諸人迷惑する法門なり云云。<sup>(2)</sup>

とあつて二乗も久遠下種の人であるが、久遠下種の時上行と同じく本化眷屬であつたが下種以後退本取迹して久遠下種を退轉し大通下種にあつた人であるから、四節三益で言う中間爲種（大通下種）にあたる。更に退大取小して小乗の人となつて仏種を敗種した。しかして釈尊は今日出世して、これらの二乗を成仏させたのである。この時、二乗成仏（現脱）の根源は過去の父の種子にあるが、それも迹門に説かれる大通下種の種子では下種の仏は始覺のため不定、従つてこの仏を發迹顯本して久遠下種に立ち返れば、二乗は本因妙上行鉢具に流入して本果妙父大王と合して、本果の父大王と本因妙上行二乗九界の王子と父子十境界如事圓三千本地難思境智の妙法蓮華經の二乗成佛であるとされる。

今説かれるところは二乗の種子下種成仏とされるところであるが、「下種」は単に種子を植えると言うことではない、即ち二乗も久遠下種の者で退轉し迹中へ流浪したものであるが、久遠下種に立ち返れば上行の體内に流

入して上行となり發迹顯本の父大王、久遠仏と合して成仏する。本果父の仏、本因は、上行二乗九界が合するとは父子天性で二乗九界は本果仏の本眷属となり、仏界と九界が互具して十界互具する、ここを二乗成仏の下種種子成仏とされる。従つてこの箇所の場合、「種子成仏」と言うものの単に成仏の種を植えるという表現で無いことがわかる。

こので説かれた成仏の世界は十界十如互具、事圓三千であり事圓三千本地難思境智の妙法蓮華經である。

### 「上行體内に流入す」について

さて種・熟・脱の三益は今見てきた如く久遠下種退轉の衆生の爲に施設されたものと考えることが出来る。久遠下種退轉の者が成仏するとは即ち脱益が説かれている、このとき退轉の衆生は上行の體内へ流入するとある。いま此の上行體内へ流入すとは如何なることか考へる。

上行出現したまはざれば、本門八品の已前已後には、眞實三千の妙法は顯れざるか。當宗の義に云く、三十十界の根本は久遠の本因本果にあり。本果は佛界、謂く釋尊なり、本因は釋尊身分の地涌上行なり。其の鉢具に九界あり、九界即上行、上行即九界にして、而も本因妙久遠下種の時は九界總在の上行なり。故に佛界の父釋尊と九界總在の上行王子と父子天性を結び、本果本因本國土三千妙法の下種を退本取迹退大取小して、大通より已來鉢外に二乗これあり、中間今日前四味までは鉢外の二乗三五七九の九界なり。今經迹門の時は開權顯實して、佛母實相の鉢内に初めて入ると云へども、上行王子の涌現これなき故に父大王も顯れず、故に二乗、鉢外にあつて上行鉢内に入らざれば、眞の十界互具界如三千の妙法も顯れざるなり。本門に至て

躰外の二乗、上行躰内に流入して久遠下種の躰具に還住して、上行躰内の所開の座に列り上行躰具の九界と成りて、本果釋尊の父大王と父子天性を顯し、父子十界界如三千の要法を、本門八品に移し末法下種の爲に要法を以て上行に付す時、眞實の十界互具界如三千の妙法蓮華經は顯るるなり。<sup>3)</sup>とあつて

久遠下種の時、仏界の釈尊と九界總在の上行と父子天性を結び、本果本因本國土三千妙法の下種があつたが、これを退轉したもの(二乗)があり、大通仏より已來、中間今日前四味まで躰外に二乗三五七九の九界が生まれ。即ち十界互具せずといふことであつた。今經迹門の時は開權顯實して仏母実相の體内入るも本門に至つていないから九界總在の上行が現れない、従つて本仏も現れず、二乗も躰外にあつてやはり十界互具せず。本門にいたつて上行が説かれれば、躰外の二乗、上行躰内に流入して久遠下種の躰具に還住して上行躰具の九界となつて本果釋尊と父子天性(眷屬となる)を顯し十界十如互具する。その三千の要法を本門八品に移して末法下種の爲の要法として以て上行に付す時、眞實の十界互具界如三千の妙法蓮華經現れるとある。

即ち久遠下種の時、その久遠成道の内容は本仏釋尊と九界總在の上行との本果妙仏界と本因妙九界との互具であり、更に本國土妙を互具した、十界十如三千。即ち事具三千の世界が成立したのであるが、その本因九界の躰内の二乗が退轉したことから躰外に九界が存在し退本取迹退大取小して六道輪廻がはじまつたのである。ここから無縁慈悲者である本仏釋尊による垂迹教化が始まつたといふことで、その始めが大通仏の覆講法華といふことであつた。従つて躰外の二乗が「上行躰内に流入」するといふことは、久遠下種の処へ戻るといふことであつた。即ち上行躰内に入ることと眞の十界互具界如三千の妙法が現れることで本来の久遠本時の本仏成道の時にもどることである。

更にこの要法は本門八品に移して末法下種の爲の要法として上行に付屬せられ、眞實の十界互具界如三千の妙法蓮華經となると説かれる。

即ち

所詮九界は上行躰内に入れば、九界久遠して眞實の九界と成る。佛界の父釋尊も上行出づれば佛界久遠して眞實の佛界と成る間、上行本化の衆一人出現したまへば、眞實の十界久遠界如三千の妙法蓮華經は顯れたまふなり。故に諸御抄に本門の妙法蓮華經、本門の妙法蓮華經と御定判これあり云云。仍て同じ本門なれども藥王品已後は地涌上行、座を起て會座になき故に、廣略二門の付屬にして本門躰内の迹門の名假躰實の法華經と云はれて、涌出品の六釋の前三釋の如く迹化他方に付するなり。六品の間に妙法蓮華經とは題したれども、上の八品の如く名眞躰實の妙法蓮華經にてはなきなり。之に依て、新池抄に云く、今此の本尊は教主釋尊五百塵點劫より心中に納めさせたまひ乃至其の後又法華經の中にも迹門はせ過ぎて寶塔品より事起て壽量品に説き顯し、神力屬累品に事極る云云。大田抄、觀心本尊抄の中に、此本門肝心於南無妙法蓮華經五字乃至但召地涌千界説於八品付屬之云云。

以上の様に見てくると、種熟脱三益は前述の通り久遠下種退轉の者のために施設されたと見ることが出来るが以下の所説がある。

當宗の意、四節釋を以て本門上行要付の義を顯すと云ふべきや。

當宗の義に云く、四節釋を詮したれば、唯本迹なり。本迹を廢迹顯本したれば唯本門なり。本門を顯す本意は、地涌を召して本門八品を説いて、要を以て上行に付し、滅後悪人を助く、之を以て如來出世の本懐と爲し、唯以一大事因縁故出現於世等と云ふなり。仍て四節釋中に、久遠下種に約せば、初・二は本化、三・

四は迹化なり。迹中現脱者に約せば、二節ばかり本化應生にして、初・三・四の三節は迹化小權迹の業・願・通の眷屬なり。此の三節を開迹顯本すれば悉く地涌體內に流入して權轉爲實但一無三（玄の七・二五ヲ）して皆悉く地涌應生の眷屬と成り已れば、四節釋は第二の一節と成り已れば、九法界悉く地涌と成り、地涌より外に眷屬なき故に、九界惣持の地涌を召し、父子天性を示し、要を以て地涌に付し、屬累品の末に地涌體內より業・願・通小權迹の諸衆を開出して廣略二門を付し、正像に熟益を成ずる故に、次に或可舉一例知有三等と釋したまへり云云。此れは觀心本尊抄（原、門）の意なり云云。<sup>5)</sup>

とあつて  
本門は地涌を召して本門八品をといて要（法）を上行に付屬し滅後惡人を助けるのが如来出世の本懷、よつて四節釋は、久遠下種に約せば、初めと第二は本化、三・四は迹化。迹中現に脱益の者から見れば第二節のみ本化應生、始め・三・四は迹化。これを開迹顯本すればごとく地涌菩薩に攝せられる玄義七（T 33, 768 b）「權轉爲實。但一無三」で皆ごとく地涌應生の眷屬である。すなわち四節は滅後末法のためである。そのため宗要集には「久遠下種末法下種」と並列して書かれる場合が多い。

#### 末法下種について

末法には久遠能開の妙法蓮華經體具の久遠能開本果妙の慈父大王釋尊、本因妙王子九法界上行等、久遠能開の諸土惣持の本國土妙日本國中との本因本果本國土十界依正界如三千の三大秘法惣在の南無妙法蓮華經を流通して、本未有善の衆生に之を授け發菩提心せしめ下種を成ず。是れ唯以一大事因緣故の釋尊出世の本懷た

る末法相應の教彌實位彌下の決定發心なり。<sup>6</sup>

とあつて、久遠能開の妙法蓮華經體具の本果釈尊・本因九界の上行菩薩・諸土總持の本國土の本因本果本國土十界互具依正界如三千の三大秘法總在のお題目を流通して未だ下種されていない衆生にこれを授け發菩提心即ち發心せしめて下種を成ずると説かれる。またこの發心は折伏とも説かれる。

付たり、折伏の發心、摂受の發心の事。

抑も發心とは下種なり、下種は權乘に亘らず故に不以餘經為種と云ふ。

(中略)

下種は本門に有りと云ふ其の證據に不輕を出す、不輕は折伏を用ひ權實本迹を簡びて逆化を用ひ衆生に久遠の本種を與ふるなり。之に依て記の十に云く彼則以順化故存於儀軌此乃以逆化故忘於恒迹云云。

此の文は廢迹顯本の本種を直ちに衆生に與ふる故に逆化と云ふ、逆化は直入本門と云ふ事なり。又流に云く本末有善不輕以大而強毒之と云へり。幸に天台宗等に不輕行は釋尊本佛行因の相を顯す等と云ふ。本佛の行因とは本因妙名字初隨喜の直入本門の發心下種なり。不輕大士は權人の四衆、三類の怨敵として罵詈誹謗を致し杖木瓦石を加へ數々見擯出遠離於塔寺の大難を蒙る事は、權迹を簡び實本を取り發菩提心の信行を勧むる故なり。故に發心と云ふ實體は折伏なり。<sup>7</sup>

本種を直ちに与えるから折伏とされる。本種は勿論お題目である。更に正境を簡ぶことをすすめる。それは肝要たる妙法三千の事で、妙法三千の中第十仏界の開未開の事である。即ち第十仏界が果頭開顯されているか否かを見極めること、本仏釈尊と諸佛を互具して本果釈尊一仏となし九界總在の本因上行をもつて「父子互融十界久遠界如三千眞實本地甚奥の妙法蓮華經を従果向因して本因妙名字信行發菩提心の正境と」<sup>8</sup>なし、本門八品を説い



て上行に付し、本仏行因の証人に不輕菩薩を示す。従つて發心も折伏、更に信行も折伏と説いて、「不受餘經一偈」と信行し大慈悲心を起こして順逆の縁を結ぶとある。

即ち

爾らば其の證文如何、答ふ、記の四に云く故知今人雖欲發心不簡偏圓不解誓境未來聞法何能免謗文。又弘の一に云く發心僻越萬行徒施云云。又云く縱使發心不眞實者縁於正境功德猶多乃至況清淨發心、故知若非正境縱無妄儀亦不成種と云へり。此の正境を簡ぶ時三種教相の如く先づ爾前法華相對して權實教部を以て之を簡びて、開權顯實の實相三千妙法を顯し、大通下種發心を顯すと雖も、肝要たる正境の妙法三千の三千の中の第十佛界を果頭開顯せざる故に釋尊諸佛互具せず、別教を帶する故に眞の三千の妙法顯れず、故に過去の發心の正境も眞實にあらず。故に此の上に迹本相對して正境を簡ぶ時、本門にして迹中請佛を開して釋尊と互融して、而も廢迹立本して釋尊一佛ばかりを以て久遠本果慈父一佛と爲し、九法界惣在の本因妙上行の王子を顯し、父子互融十界久遠界如三千眞實本地甚奥の妙法蓮華經を從果向因して本因妙名字信行發菩提心の正境と爲し、本門八品を説いて上行に付す。其の本佛行因の証人に不輕行を出す、故に發心の心地は折伏なり。故に信行も權迹を簡び本門妙法蓮華經の正境を取つて直入法華して信心を起す故に信行も折伏なり。此の故に本門流通日蓮宗は不輕の先證に任せて不受餘經一偈と信行して、大慈大悲を起して諸宗を呵責して順逆兩縁を結ぶ。

故に我等一分の惠解もなく坐禪安心せずと雖も大悲心を起して諸宗を教訓する、是れ最上の發心なり。之に依て弘の一に云く世人多以坐禪安心名為發心此人未都識所緣境無所期果全無上求不識大悲全無下化是故發心從大悲起と釋し給へり。<sup>(8)</sup>

とあり。

しかしながら我ら一分の恵解もなくと述べられるも座禪安心せず、諸宗を教訓する事が最上の発心と説かれる。

### 結論

「開迹顯本宗要集」において四節三益を中心に種・壽・脱を管見したのであるが、当初の仮説であった「下種」が単なる植物の種のような仏種子が植えられることではないとは、「下種」は仏の悟りの世界として成立した事三千の世界であり我々を含めた久遠本時の世界が説かれることであると思う。しかしその世界は我の理解の中のことではなく本仏釋尊の教えの中にあるもので「我ら一分の恵解もない」世界である。従ってそこには釋尊の教え即ち法華經に対する衆生の信行と本仏の大慈悲心が要請される。この他「境智冥合」の事、「従果向因」の事、「下種は上行においてなされる」事などの問題は後の機会に考える。

### 註

- (1) 「開迹顯本宗要集」一巻二四頁
- (2) 「開迹顯本宗要集」二巻一九三頁—一九四頁
- (3) 「開迹顯本宗要集」二巻二二四頁
- (4) 「開迹顯本宗要集」二巻二二五頁

- (5) 『開迹顯本宗要集』 四卷二〇五頁
- (6) 『開迹顯本宗要集』 一卷二六一頁
- (7) 『開迹顯本宗要集』 一卷二四二頁
- (8) 『開迹顯本宗要集』 一卷二四三頁